

ウマの共同養育に関する観察研究

指導教員 瀧本彩加

氏名 藤田道郎

血縁関係だけでは説明しきれない、利他行動がヒトだけでなく、他の動物種でも確認される。シマウマやウマなど一部の有蹄類では飼育下でも、自然下でも共同養育が確認される。共同養育とは、親以外の個体による子どもへの養育的な関わりを意味する。共同養育の利益として次のものが挙げられる。第1に、群れサイズの増加によって生存率が向上する。第2に、なわばりを相続できる。第3に、子育ての経験は将来の繁殖に役立つ。第4に、繁殖に加わるチャンスがある。第5に、包括適応度の上昇である。ただ、ウマに関して、どのような特性を持った個体が共同養育をし、どのような特性を持った個体が共同養育を受け、またその共同養育には上記したどの利益があるのか、上記したものにはない利益があるのかまだ明らかになっていない。そこで本研究では、北海道和種馬のおとなメス32個体とその子23個体、交配期のみ合流するオス1個体の計56頭を観察対象個体とし、まず共同養育を受けた個体を群れにいる子ウマすべてを対象に、母以外のおとなメスとの親和的な接触の有無と頻度・近接率を確認し、共同養育を受けている子ウマと共同養育個体を特定した。その結果、13頭のメスで子ウマとの親和的な接触が確認され、全体の約40%を占めるメスが共同養育に関わることが確認された。なお、共同養育個体とその対象の子ウマが血縁関係にある場合が41%、血縁関係にない場合が59%と、必ずしも血縁関係にあるとは限らないこともわかった。次に、共同養育を行う個体の特性を検討したところ、ウマのメスが共同養育をする割合は、授乳中の子どもがいるメスよりもいないメスで有意に多いがわかった。また、子なしメスでは、非共同養育個体は共同養育個体よりも子育て経験量が有意に多いことがわかった。以上の結果は、共同養育は、包括適応度を上げることにも寄与するが、子育て経験が少ないメスが子育て経験を増やすことにも寄与している可能性を示唆している。最後に、共同養育を受ける母子の特性を検討したところ、共同養育を受けた個体の方が、受けていない個体よりも、母ウマ以外の個体に自ら接近する割合が高かった。以上の結果は、共同養育を受けることが子ウマの社交性を高める機能を果たしている可能性を示唆しているかもしれない。ただし、多くの指標については、共同養育を受けているか否かで差がなかったことから、共同養育の対象個体選びは重要ではなく、共同養育をすること、それ自体が共同養育をする側にとっても、受ける側にとっても、利益となっていることが示唆された。